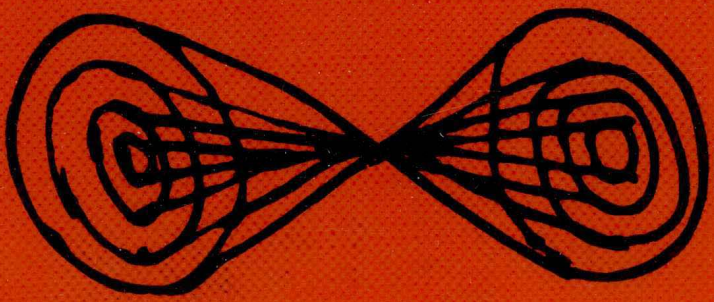

ツルゲーネフ

金子幸彦・錦織綾紹・中山省三郎訳

世界文學大系

31

筑摩書房版

世界文学大系 31

ツルゲーネフ

昭和37年4月30日発行

定価500円

訳者代表　金子幸彦
発行者　古田晁
印刷者　山元正宜
発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768　電話 (291)局 7651

目次

ルーヂン　金子幸彦訳　5
その前夜　金子幸彦訳　90
父と子　錦織綾紹訳　192
猟人日記抄　中山省三郎訳　321
散文詩より　一條正美訳　89 191 320 380
イヴァン・ツルゲーネフ　プロスペル・メリメ　高橋安光訳　381
解説　金子幸彦　387
年譜　397

裝

幀

庫

田

發

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ツルゲーネフ

Русскій язык

В дни сомнѣній, в дни тягостныхъ размышленій о судьбахъ моей родины — ты одинъ мнѣ поддержка и опора, о великій, могучій, правдивый и свободный русскій языкъ! — Не будь тебя — какъ не впасть въ отчаяніе, при видѣ всего, что совершается дома? — Не можетъ быть, чтобы такой языкъ не былъ данъ великому народу!

Іюнь. 1882.

ツルゲーネフの筆蹟（「散文詩」原稿）

ルーヂン

一

しずかな夏の朝のことであった。太陽はすみきった空にすでにかなり高くのぼっていた。しかし野はまだ露にきらめき、めざめたばかりの谷間から、かぐわしい、さわやかな風が吹きよせて、まだしめりをおびた、ひっそりとした森のなかでは、早起きの小鳥たちの、楽しげな歌声がきこえる。花をつけはじめたばかりの裸麦にくまなくおおわれた、ゆるやかな丘の上に、小さな村が見える。この村をめざして、ひとりの若い女がほそい道を歩いてゆく。白いモスリン服を着て、まるい麦わら帽子をかぶり、日傘をさしている。カザークのなりをした召使の少年が、すこしはなれて、そのあとからついてゆく。

若い女は散歩を楽しむかのようにゆっくりと歩いていった。そのまわりには、丈の高い、ゆらゆらした裸麦の上を、そよ風が、いくつもの、ながい波の列となって、やわらかなざわめきをたてながら、吹きすぎてゆく。それはときにしろがね色にかがやく、みどりのさざ波となり、ときに赤味をおびたさざ波にかわる。空には、ひばりの声がひびいていた。若い女はいま目ざしてゆく村から一ヴェルスタたらず離れた、自分の持ち村から出かけてきたのである。名をアレクサンドラ・パーヴロヴナ・リーピナといって、未亡人で、子供もなく、かなりの財産家であった。弟のセルゲイ・パーヴロヴィッチ・ヴォルィンツェフという退役の騎兵二等大尉とともに暮らしていた。これはまだ独り身で、姉の財産の管理にあたっていた。

アレクサンドラ・パーヴロヴナは村までくると、そこのはずれにある、ひどくふるびた、ひくい小舎のそばで立ちどまった。そして自分の召使を呼びよせ、なかへはいっておかみさんの容態をたずねるように言いつけた。まもなく召使は、白いあごひげの、よぼよぼした百姓をつれて、もどってきた。

――ようすはどう？――とアレクサンドラ・パーヴロヴナはたずねた。

――生きておりますだよ……――と老人は答えた。

――はいってもいい？

――なんの、いいですとも。

アレクサンドラ・パーヴロヴナは小舎のなかへはいった。なかはせまく、息ぐるしく、煙がたちこめていた……だれかが煖炉の上の寝床のなかで動きだして、うめき声をたてた。アレクサンドラ・パーヴロヴナがふりむくと、うす暗がりのなかに、格子縞のプラトークをかぶった老婆の、黄色い、しわだらけの顔が見えた。厚手の百姓外套を胸元までかけて、やせほそった手を弱々しくひろげながら、やっとのことで息をしていた。

アレクサンドラ・パーヴロヴナは老婆に近よって、指先でそのひたいにさわってみた……ひどくほてっている。

――気分はどう、マトリョーナ？――と彼女は寝床の上に身をかがめてたずねた。

――おお！――老婆はアレクサンドラ・パーヴロヴナを見つめてうなった――もうだめでござんすよ、奥さま！　おむかえの時がきただよ。

――神さまはおなさけぶかいよ、マトリョーナ、よくなるかもしれないよ。わたしのよこした薬はのんだの？

老婆は悲しげにうめくばかりで、答えなかった。相手のことばが聞きとれなかったのである。

――のんだですよ――と戸口に立っていた老人が答えた。

アレクサンドラ・パーヴロヴナはそっちをふりむいた。

――おまえさんのほかには、だれもついていないの？――と彼女はたずねた。

――小むすめがいますだよ。孫ですが、しょっちゅうとび出して、ちっともじっとしとらんで、落ちつきのねえやつでの。婆さんに水飲ませるのさえ、面倒くさがっての。わしはこのとおり老いぼれで、どうにもならんので。

――うちの病院へいれたほうがよくないかし

ら？

――いや！　病院なんぞいれてみたって、どうにもならんですわい。どっちみち死ぬにきまっているですよ。もういい加減生きたですから、これが神様のおぼしめしでござんしょう。それに寝床から下りることもなんねえ者が、なんで病院さ行かれるもんで！　起こしてでもみなされ、そのまま死んじまうべえよ。

――おほ――と病人はうなった――器量よしの奥さま、よるべもねえ、おらの孫むすめを見すてねえでくだされ。ここの主人どもは遠いけんど、おまえさまは……

老婆は急にだまった。力がつきてしまったのである。

――心配しなくてもいいよ――とアレクサンドラ・パーヴロヴナは言った――なにもかもやってあげるからね。お茶と砂糖をもってきたからね。ほしくなったら飲みなさいよ……サモワールはあるんだろうね？――と老人の方を見て、つけ加えた。

――サモワールかね？　サモワールはうちにはねえけど、借りてくるんだね。それともうちのをとどけてあげよう。それから、孫むすめにうちを空けないように言うんだね。はずかしいことだって言っておやりよ。

老人はなんとも答えなかったが、茶と砂糖の包みを両手でうけとった。

――それじゃ、さよなら、マトリョーナ！――とアレクサンドラ・パーヴロヴナは言った――またきますからね。くよくよしないで、薬をきちんとのみなさいよ……

老婆はすこし頭をあげて、アレクサンドラ・パーヴロヴナの方へ体をのばした。

――奥さま、お手を――とまわらぬ舌で言った。

アレクサンドラ・パーヴロヴナは手をさし出さずに、身をかがめて相手の額に接吻した。

――よく見てやりなさいよ――と彼女は帰りしなに老人に言った――薬は書いてあるとおりにかならずのませてね。お茶もたんとのませなさいよ……

老人はやはりなにも答えないで、ただ頭をさげた。

さわやかな空気のなかに出て、アレクサンドラ・パーヴロヴナはほっとした。日傘をひろげ、帰りかけようとすると、不意に小舎のかどから、ひくい競走用の馬車にのった、年のころ三十ぐらいの男が現われた。古ぼけた灰色の亜麻織り外套を着て、同じような帽子をかぶっている。アレクサンドラ・パーヴロヴナのすがたを見かけると、その男はすぐ馬車をとめて、ふりむいた。青味をおびた灰色の、大きくない目と白っぽい口ひげをもったその顔は、はばがひろく、血の気がなくて、彼の着ている服の色に似つかわしかった。

――おはようございます――気のりのしないような笑いをうかべて、その男が言った――こんなところで、なにをしていらっしゃるんです？

――病人の見舞いにきたんです……あなたは、どこから、ミハイロ・ミハイルィッチ？

ミハイロ・ミハイルィッチと呼ばれた男は彼女の目を見て、またうす笑いをうかべた。

――それはいいことをなさいました――と彼はことばをつづけた――ですが、病院へいれたほうがいいんではないですか？

――衰弱がひどくて、動かせないんです。

――お宅の病院はとりはらうおつもりじゃないんですね？

――とりはらうって、どうして？

――いや、べつに。

――ずいぶんへんなお話ですね？　どうしてそんなことを考えたんですの？

――それはね、あなたがあのラスンスカヤさんといつもつきあっていて、だいぶ感化されたようにお見うけするからです。あのひとの説だと、病院だの学校なんていうものは、みんなくだらないもので、無用な思いつきだというのでしょう。慈善というものは個人的なものでなくてはならない、教育も同様で、つまり、これらはすべてたましいの仕事なのだから……とかいうことのようですね。だれの口まねなのか、知りたいもんですね？

アレクサンドラ・パーヴロヴナは笑いだした。

――あのダーリヤ・ミハイロヴナは利口なかたで、わたしも大好きですし、尊敬もしていま

すわ。でもあの人だって、まちがうことはありますし、わたしにしたって、あの人の言うことを、なにもかも信じているわけではありませんわ。

——それは結構です——ミハイロ・ミハイルィッチは、まだ馬車からおりようとしないで、言いかえした——なにしろ、あのひとは自分でも自分のことばをあまり信用していないんですからね。ところで、お目にかかれてたいへんうれしいです。

——どうしてですの？

——これはおそれいりました！　まるでお目にかかって愉快でないときもあるみたいじゃありませんか！　きょうはまたとりわけすがすがしくお美しいですな、まるでこの朝のように。

アレクサンドラ・パーヴロヴナはまた笑いだした。

——なにがおかしいのですか？

——なにがですって？　あなたがそんなお世辞を言うときの、その浮かない、つめたい顔つきをご自分で見ることができないのが残念ね。言いおわったとたんにあくびが出なかったのがふしぎなくらいですわ。

——つめたい顔つきですか……あなたにはいつも火が必要なんですね。ところが、火なんていうものはなんの役にも立たんものですよ。もえあがって、しきりに煙を出して、それから消えてしまう。

——でも、あたためてくれます——とアレクサンドラ・パーヴロヴナは言った。

——そう……しかし火傷もします。

——でも火傷ぐらい！　大したことではありませんわ。それより……

——一度ひどく火傷をしたうえで、まだそうおっしゃれるかどうか、見ていることにしましょう——ミハイロ・ミハイルィッチはいまいましげに彼女のことばをさえぎると、手綱で馬をたたいた——では、さようなら。

——ミハイロ・ミハイルィッチ、ちょっと！——アレクサンドラ・パーヴロヴナは声を高めて言った——いつうちへお出でになります？

——あすうかがいます。弟さんによろしく。

そして馬車はかけ去った。

アレクサンドラ・パーヴロヴナはしばしのあいだミハイロ・ミハイロヴィッチのうしろすがたを見ていた。

《まるでふくろだわ！》と彼女は心に思った。たしかに、彼が背中をまるめ、ほこりだらけになって、帽子をあみだにかぶり、その下から黄色い髪の毛のふさをはみ出させているところは、大きな粉ぶくろそっくりだった。

アレクサンドラ・パーヴロヴナはしずかに家の方へもどっていった。下を見ながら歩いてゆくと、間近に馬のひづめの音がきこえた。彼女は立ちどまり、顔をあげた……。彼女の弟が馬にのって近づいてきた。それとならんで、ひとりの小柄な、若い男が歩いている。その男はいきなフロック・コートのボタンをはずして、いきなネクタイをしめ、ねずみ色の帽子をかぶり、手には細身のステッキをもっている。彼はアレクサンドラ・パーヴロヴナがすこしも気づかずに思いにふけって歩いてくるのを見ながら、さきほどから彼女にほほえみかけていたのだが、相手が立ちどまると、さっそく、そばへ寄ってきて、よろこばしげに、ほとんどあまったるいような調子で言った。

——おはようございます、アレクサンドラ・パーヴロヴナ、おはようございます。

——あら、コンスタンチン・ヂオミードィッチ！　おはようございます！——と彼女は答えた——ダーリヤ・ミハイロヴナのお使いでいらしたの？

——さようでございます、さようでございます——若い男は顔をかがやかせて答えた——ダーリヤ・ミハイロヴナからのお使いで、お宅へ参ったのでございます。歩いてゆこうと思いまして……すばらしい天気ですし、道のりもたかだか四ヴェルスタほどしかございませんし。お宅へあがりましたら、おるすでございました。弟さんのお話では、セミョーノフカ村へお出かけになったということで、弟さんもはたけを見まわりに行かれるところでございましたので、わたくしもご同道して、お迎えにあがったわけでございます。はい。ほんとにいいところでお目にかかりました！

若い男はきれいな、正しいロシヤ語を話したが、発音に外国のなまりがあった。もっとも、

そのなまりも、どこがどうということを指摘することはむずかしかったが。顔つきには、なんとなくアジア人らしいところがあった。長いかぎ鼻、動かない大きな出目、厚い赤いくちびる、傾斜した額、タールのように黒い髪――すべては彼が東方の生まれであることを示していた。しかし彼はパンダレフスキーという姓を名のり、ある慈悲ぶかい、金持の後家の世話で、白ロシヤのどこかで教育をうけたこともあるというが、自分の郷里はオデッサだと称している。また別の未亡人のとりなしで勤めについたこともある。概して中年の婦人たちが進んでこのコンスタンチン・ヂオミードィッチの保護者となってくれた。それというのも、この男はこうした婦人たちを見つけて、とりいる術を心得ていたからである。いまもダーリヤ・ミハイロヴナ・ランスカヤという富裕な女地主のもとで、養子ともつかず、食客ともつかぬ形で暮らしていた。すこぶる愛想がよく、世話好きで、感情もゆたかなほうで、内心は色好みであった。声も感じがよく、ピアノも上手に弾きこなし、話をするときには、相手を喰い入るように見つめるくせがあった。身なりはすこぶるこざっぱりとしていたし、服はおどろくほど長持ちさせて着ていた。ひろいあごには念入りに剃刀をあて、髪も一本一本なでつけていた。

アレクサンドラ・パーヴロヴナはこの男の話をしまいまできいてから、弟にむかって言った。

――きょうはよくよく人に会う日だわ。いまもレジネフさんと話していたのよ。

――へえ、あの男と！　どこかへ出かけたんですか？

――そうなの。それがどうでしょう。競争馬車なんかにのって、ズックのふくろみたいな服を着て、ほこりまみれになって……変わっているわね！

――そうかもしれない。しかしいい人間ですよ。

――どなたのことで？　レジネフさんがですか？――おどろいたような調子で、パンダレフスキーがたずねた。

――そう、ミハイロ・ミハイルィッチ・レジネフですよ――ヴォルィンツェフは言い返した――じゃ、さよなら、姉さん、ぼくははたけへゆく時間だから。そばの種まきをやっているんですよ。パンダレフスキーさんに家まで送ってもらうといい……

そしてヴォルィンツェフは馬をだく足で走らせた。

――この上もないしあわせで！――とパンダレフスキーは大きな声で言うと、アレクサンドラ・パーヴロヴナに腕をさしだした。

彼女も相手に腕をあたえ、ふたりは彼女の家へむかった。

アレクサンドラ・パーヴロヴナと腕を組んで歩くことに、パンダレフスキーは大きな満足をおぼえているようすで、小刻みに足を運びながら、微笑していた。その東洋的な目はうるみをおびてさえいた。もっともこれは珍しいことでもなく、感動したり、なみだを流したりすることは、彼にとっては、なんでもないことだった。それにしても、若くて、すがたのいい美人と手に手をとって歩くのは、だれにせよ、悪い気はしないだろう。アレクサンドラ・パーヴロヴナが美人だというのは県下の一致した評判で、それもまちがってはいなかった。びろうどのような茶色の目や、金色にかがやく亜麻色の髪や、ふくよかなほほのえくぼ、そのほかの美点を数えあげるまでもなく、かすかに上をむいた、その端正な鼻だけでも、人の心を夢中にさせるにたるものであった。とりわけ見事なのはその愛くるしい顔の表情で、人を信じきった、善良な、やさしい面ざしは、相手を感動させ、ひきつけるものをもっていた。アレクサンドラ・パーヴロヴナの目つきや笑い方は子供のようだった。奥さんたちは彼女をかざり気のない人と評していた。……これ以上の評判を望む必要があろうか？

――ダーリヤ・ミハイロヴナからのお使いだということでしたね？――と彼女はパンダレフスキーにたずねた。

――はい、お使いで参ったのでございます――彼はすを英語のthのように発音して答えた――たってのご希望で、きょう食事においでいただけるよう、よくお願いしてこいとのご命令でございました。奥さま（パンダレフスキーは第三者、ことに貴婦人のことを話すときには、厳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

格に複数形を守っていた）はあたらしいお客さまをお待ちいたしておりまして、そのかたをぜひとも、あなたさまに、ご紹介いたしたいのだそうでございます。

――どういうおかた？

――ムッフェリさんとかおっしゃる男爵で、ペテルブルクから見えた侍従補でございます。ダーリヤ・ミハイロヴナもちかごろ、ガーリン公爵のところで、お近づきになられたのでございますが、親切で教養のある青年だとたいへんなほめようでございます。その男爵もやはり、文学、というよりはむしろ……あ、なんてきれいな蝶でしょう！　ほれ、ごらんください……文学よりは経済学の方を研究しておられるそうです。なにかたいそう興味ぶかい問題について論文をお書きになりまして、そして、それをダーリヤ・ミハイロヴナに批評していただこうということなので。

――その経済学の論文を？

――いいえ、文章の点です、アレクサンドラ・パーヴロヴナ、文章の点で。ご存じと思いますが、この方面でもダーリヤさまはくろうとでございますからね。ジュコーフスキーから意見を求められたこともあり、また、手前の恩人で、オデッサにずっと住みついておられるロクソラン・メヂアロヴィッチ・クサンドルイカと申す、りっぱなお年よりのかたも……このおかたの名前はご存じでいらっしゃいましょう？

――いいえ、ついぞ聞いたこともありませんわ。

――お聞きになったことがない？　これはおどろきました！　ともかく、そのロクソランというかたでさえも、ダーリヤ・ミハイロヴナのロシヤ語の知識には、いつもたいそう敬服しておられました。

――でも、その男爵っていうかたはペダントじゃありませんの？――とアレクサンドラ・パーヴロヴナはたずねた。

――とんでもございません。ダーリヤ・ミハイロヴナのお話では、反対に、見るからに社交的なかただということでして。ベトーヴェンのことなども、老公爵さまさえうっとりとなさったほど、見事にお話しになったそうでございます。そういうお話は、実はいつもわたくしもうかがいたいくらいでございました。なにしろ、これはてまえの領分でございますからね。このきれいな野花を一つさしあげましょう。

アレクサンドラ・パーヴロヴナは花をうけとったが、五、六歩ゆくうちに道ばたに落としてしまった。……家まではもう二百歩ほどしかなかった。新築の、白塗りの家は、年ふりたぼだい樹やかえでの、濃いみどりのなかから、ひろい、明るい窓をのぞかせて、人を迎えるように立っていた。

――それでは、ダーリヤ・ミハイロヴナへはどのように申しあげましょうか――自分の贈った花の運命にいささかきげんをそこねて、パンダレフスキーは言った――食事にはおいでいただけましょうか？　弟さんにもどうぞ、ということでございましたが。

――そうね、ふたりでゆきます、きっと。ときに、ナターシャはどうしていますか！

――ナターリヤ・アレクセーエヴナはお元気でいらっしゃいます……しかし、もうダーリヤ・ミハイロヴナのご領地への曲がり角をすぎましたから、ここいらで失礼させていただきます。

アレクサンドラ・パーヴロヴナは立ちどまった。

――あら、うちへ寄りませんの？――と彼女はためらうような声でたずねた。

――ぜひそうさせていただきたいところでございますが、おそくなるといけませんので。ダーリヤ・ミハイロヴナがタールベルクのあたらしい練習曲をおききになりたいのだそうで。すこしおさらいをしておきませんと。それに、実を申しますと、わたしのような者がお話相手をつとめたところで、お気に召すかどうかもあやしいものでございますから。

――そんなことありませんわ……どうしてそんな……

パンダレフスキーはため息をついて、思わせぶりに目をふせた。

――では、ごめんくださいまし、アレクサンドラ・パーヴロヴナ！――彼はしばらく黙っていてから、そう言うと、おじぎをして、一歩さがった。

アレクサンドラ・パーヴロヴナは向きを変えて、家の方に歩いて行った。

コンスタンチン・ヂオミードィッチ（パンダレフスキイ）も家路についた。その顔からは、甘ったるさがたちまち消え去って、自信にみちた、ほとんどきびしいばかりの表情が現われた。足どりまでが一変して、こんどは大股に、おもおもしく足を運んだ。ステッキを思いきりふりまわしながら二ヴェルスタちかくきて、急にまた口もとに笑みをうかべた。道のほとりに、麦畑から小牛どもを追い出している、なかなか器量よしの百姓むすめを見つけたからだ。パンダレフスキーは、ねこのように用心ぶかく、むすめの方へ近よって、ことばをかけた。相手ははじめのうち、だまって顔をあからめながら、ときどき笑っていたが、そのうちに口をそでで隠くして、横をむいて、言った。

――あっちさ行きなせえよ、旦那さん、ほんとに……

パンダレフスキーは指で彼女をおどしてみせてから、矢車菊を摘んでくるように言いつけた。

――なんにするだ、矢車菊を？　花環でも編むだかね？――とむすめは言い返した――それより、早く行けってば、ほんとに……

――まあおききよ、べっぴんさん――とパンダレフスキーは言いかけた……

――ねえ、行けってば――とむすめがそれをさえぎった――ほれ、坊っちゃんがたがきなさるよ。

パンダレフスキーはふりかえった。なるほど道を駆けてくるのはダーリヤ・ミハイロヴナのむすこのワーニャとペーチャで、そのあとから家庭教師のバシーストフという、大学を出たばかりの、二十三歳の若者がついてきた。このバシーストフというのは、のっぽで、正直そうな顔つきをして、大きな鼻、大きな口、ぶたのような小さな目をしていて、風采のあがらぬ、ぎごちない若者であったが、そのかわり、善良で、誠実で、一本気だった。身なりもかまわず、髪もからなかったが、それは気どっているのではなくて、無精からだった。好きなことといっては、食うことと眠ることだったが、よい本や熱心な議論も好きだった。そしてパンダレフスキーを心の底から憎んでいた。

ダーリヤ・ミハイロヴナの子供たちはバシーストフになついて、すこしもこわがらなかった。家のなかのすべての召使たちとも彼は親しくしていたが、このことは女主人公にはあまり気にいらなかった。もっとも彼女は自分が偏見などというものはもっていないといつも語っていたが。

――おはよう、坊っちゃん！――とパンダレフスキーは声をかけた――きょうはまたずいぶんはやく散歩にきましたね。もっともぼくは――とバシーストフの方に向き直って――もうとっくに出てきたんだがね。ぼくは自然を楽しむのが大好きでね。

――いや、あなたがどういう自然を楽しんでいるか拝見しましたよ――とバシーストフはつぶやくように言った。

――きみはマテリアリストだ、現になにを考えているか知れたもんじゃない。ぼくには、きみという人間はよくわかっているよ！

パンダレフスキーは、バシーストフとか、これと似た連中と話をすると、すぐに腹を立て、そしてすの音をはっきりと、むしろやや口笛のような響きをまぜて発音するくせがあった。

――このむすめに道でもきいていたんですか？――目を左右に動かしながら、バシーストフが言った。

彼はパンダレフスキーがまともに自分の顔を見つめているのを感じていた。それが彼にはひどく不愉快だった。

――もう一度言うがね、きみはマテリアリストだ。それだけの話さ。きみは何事につけても、いつも散文的な側面しか見ようとしないのだ……

――坊や！――いきなりバシーストフが号令をかけた――ほら、むこうの原っぱに、やなぎの木が見えるでしょう。だれがあすこまでいちばん先にゆくか、競争しよう……一、二、三！

子供たちは、やなぎをめざして、いちもくさんに走りだした。バシーストフもそのあとを追った……《土百姓めが！――とパンダレフスキーは思った――子供たちを台なしにしちまうぞ……まぎれもない土百姓だ！》

そして、おのれのこざっぱりとした、優美な

すがたを得意げに見まわすと、ひろげた指先で二度ほどフロックコートのそでをたたき、カラーをゆすぶってから、ふたたび歩きだした。自分の部屋にもどると、彼は古ぼけた部屋着に着かえ、気がかりな面もちで、ピアノのまえに腰をおろした。

二

ダーリヤ・ミハイロヴナ・ラスンスカヤの屋敷は、＊＊県下でもおそらく第一のものに数えられていた。ラストレーリの図面に型どって十八世紀風に建てられた、大きな、石造のこの家は丘の上にいかめしくそびえたち、その丘のふもとには、中部ロシヤのおもな河の一つが流れていた。ダーリヤ・ミハイロヴナ自身は身分の高い、富裕な婦人で、枢密顧問官の未亡人であった。パンダレフスキーの言うところでは、彼女は全ヨーロッパを知り、ヨーロッパもまた彼女を知っているとのことであったが、ヨーロッパで彼女がそれほど知られているはずもなく、ペテルブルクにおいてさえ、重要な役を演じてはいなかった。そのかわり、モスクワでは、すべての者が知っていて、彼女を訪問した。彼女は上流社会に属し、いくらか風変わりな、あまり善良とはいえないが、すこぶる頭のいい婦人だ、と言われていた。若いころにはなかなかの美人で、詩人たちから詩をささげられたり、青年たちに恋をされたり、名士たちから言い寄られたりしたものであった。しかしそれから二十五年か三十年もたった今では、むかしの色香はあとかたもなく消え失せていた。彼女をはじめて見かけた者はだれでも、思わず、《このやせこけて、黄色くなって、鼻のとがった、そのくせまだそれほどの年でもない女が、かつては美人だったというのは本当だろうか？　これが詩人たちから詩をささげられたという、あの婦人なのだろうか？》と自分にたずねるのであった。そしてだれでも心ひそかに、地上のもののうつろいやすさに、おどろくのであった。もっともパンダレフスキーの説では、彼女のすばらしい目はおどろくほどむかしの面影をとどめているということである。しかしヨーロッパじゅうが彼女を知っていると語っていたのもこのパンダレフスキーである。

ダーリヤ・ミハイロヴナは毎年、夏になると、子供連れで自分の持ち村にきた（彼女には三人の子供、すなわち十七歳になるむすめのナターリヤと、十歳に九歳のふたりのむすこがいた）。そして客たちを招いて日をすごした。それも、男たち、とりわけ独り者の男たちを招待していた。田舎住まいの奥さん連などは大嫌いだった。そのかわり、彼女はそれらの奥さん連からもよく言われなかった。彼女たちの評判では、ダーリヤ・ミハイロヴナは頭が高くて、ふしだらで、ひどい暴君で、とりわけ、会話のなかでは、おそろしくなるほど無遠慮なことを平気で口にするということであった。ダーリヤ・ミハイロヴナは田舎では気がねをするのを好まなかったから、その自由な、率直なふるまいには、彼女をとりまく、かなり無知な、身分のひくい人々にたいする、首都の牝獅子のかすかなさげすみの色が見えていたことも事実である……。彼女は、都会の知人たちとのつき合いでも、すこぶる無遠慮なほうで、相手をからかうようなところさえあったが、そういうときには、見くだしたりするような態度は見せなかった。

ついでに言えば、読者はお気づきかもしれないが、目下の者たちにすこしも気がねをしない人間にかぎって、目上の者には、ひどく気がねをするものである。これはどういうわけなのであろう。もっとも、こんな疑問はなんの役にもたたないであろうが。

コンスタンチン・ヂオミードィッチが、やっとタールベルクの練習曲をそらでおぼえて、清潔な、明るい自分の部屋から、客間へおりてみると、家じゅうの人はすでにそこに集まっていた。サロンはもうはじまっていたのである。はばのひろい長椅子には、女主人がくつをぬいですわって、フランスのあたらしいパンフレットのページをめくっていた。窓ぎわの、ぬいとり台のうしろの席には――一方にダーリヤ・ミハイロヴナのむすめ、すこしはなれてマドモワゼル・ボンクールがいた。これは家庭教師で、まだら色の部屋帽子の下に黒い髪のかもじをつけ、耳には綿をつめている、六十ほどのひからびた老嬢である。すみの戸口には、パシーストフが席を占めて、新聞を読んでいる。そのそばでは

ベーチャとワーニャがしょうぎをさしている。また煖炉によりかかって、両手を背中にくんで立っている、もつれた白髪頭にあさ黒い顔をした、そしてよく動く黒い目の、小柄な紳士は――アフリカン・セミョーヌィッチ・ピガーソフとかいう人物であった。

このピガーソフ氏というのは奇妙な男で、すべてのこと、すべての人間に腹を立て、とりわけ女を目のかたきにして、朝から晩まで悪態をついていた。ときにはすこぶるうがったことを言うが、ときにはかなりばかげたことも言う。それでいて、本人はいつも楽しんでいるのであった。彼の怒りっぽさは子供じみたほどのもので、その笑いも、声のひびきも、その存在そのものまでが癇癪のかたまりであるかのように見えた。ダーリヤ・ミハイロヴナは好んでピガーソフを家に出入りさせていたが、それはこの男のとっぴな言行がなぐさみになっていたからである。彼の言行はたしかにかなり気ばらしになった。すべてを大げさに言うのが彼の情熱で、たとえば、彼のいるところで、なにかの災難の話でも出て、落雷で村が焼けたとか、水車小屋が水びたしになったとか、百姓が斧で片手を切り落としたとかいうような話を聞くと、彼はいつもかならず怒りをこめてこうたずねるのだった「その女はなんという名前なんです？」すなわち、その災難のもとになった女はだれかということなのだが、彼の断言するところによると、どんな災難もかならず女が原因となっているものであって、これはよくしらべてみれば、すぐわかることだ、というのである。あるときなども彼は、ぜひご馳走したいからと彼を招いてくれた、ほとんど面識もない貴婦人のまえにひざまずくと、なみだながらに、しかし怒りの色をうかべて、自分はなにもあなたに悪いことをしたおぼえはないし、これからもけっしてお宅へはうかがわないからと言って、ゆるしを乞いはじめた。また、あるとき、ダーリヤ・ミハイロヴナの洗濯女のひとりがのっていた荷馬車の馬が、急に坂道をかけおりて、彼女を掘割のなかへなげ落として、死にそうな目にあわせたことがある。ピガーソフは、それからというもの、この馬を「実にいい馬だ」と言うようになり、この坂道や掘割までも絵のような景色だとほめたたえていた。

生活の上では、ピガーソフは幸運ではなかった――彼はその愚かしい奇行ぶりを自分自身の上にもふりむけたのである。この男は貧しい両親から生まれた。父親という人はさまざまな、しがない勤めについていたが、まともに読み書きもできないほどで、むすこの教育について気をくばるようなことはしなかった。食わせて、着せるだけがせいぜいだった。母親は甘やかしてくれたが、これは早死にしてしまった。ピガーソフは自分で自分を養い、郡の小学校へあがり、それから高等学校へ進んで、フランス語とドイツ語、さらにラテン語までおぼえた。そして優等の卒業証書をもらって高等学校を出ると、デルプトにおもむき、ここでたえず貧困とたたかいながら、ともかく三年の課程をおえた。才能の点では他の者よりすぐれていたわけでもないが、彼は忍耐と根気がとりえで、ことに名誉心、すなわち上流社会へはいりたいとか、他人に遅れをとりたくないとか、運命を見返してやりたいとかいう気持がつよかった。熱心に勉強したのも、デルプト大学へ入ったのもこの名誉心から出たことだった。貧乏に腹をたてていたので、おのずから目さきのきく、抜け目ない人間になった。話し方も変わっていた。若いころから、にが味のある、いらだちやすい、独特な雄弁を身につけていた。彼の思考は一般の水準からぬきんでていたわけではないが、かしこいばかりではなく、ずばぬけてかしこい人間と思われるような口のきき方をした。学士候補の資格をとると、ピガーソフは学問で身を立てることに心をきめた。ほかの世界では、どこでも、とても同僚と肩をならべてゆけそうにもないと見てとったからだ。（その同僚をも彼はつとめて上流社会からえらび、たくみに彼らのまねをし、悪口を言いながらも、彼らにへつらうことさえしたのである。）しかしありのままに言えば、彼には基礎ができていなかった。学問が好きというわけでもない独学者のピガーソフは、実際には、あまりにも学識にとぼしかった。学位論文の審査の討論で彼はひどくしくじった。ところが、彼がいつもあざわらっていた同室の学生は、すこしも才能はなかったのに、正規の

しっかりした教育をうけていたおかげで、見事に勝利をえた。この失敗にピガーソフはひどく腹をたて、自分の本もノートもことごとく火中に投じてしまった。そして官職についた。はじめのうちはうまくいった。あまり事務処理の才があるほうでもなかったが、そのかわり、すこぶる自信にみちた、機敏な役人として、どこへ出してもはずかしくなかった。しかし出世をあせって、道をあやまり、しくじりをやって、職をしりぞかなければならなくなった。さいわい小さな村が買いとってあったので、彼はそこに三年ばかりひきこもっていたが、そのうち、もちまえの無遠慮な、人をばかにしたような態度を餌にしてあさる金持の、あまり教育のない女地主の心をひきつけて、彼女とだしぬけに結婚してしまった。けれどもピガーソフの性格はもはやあまりにもすさんで、ひねくれてしまっていたので、家庭生活は彼にはわずらわしかった……妻は、幾年か彼といっしょに暮らしたあげく、ひそかにモスクワに去って、自分の名儀の領地を、ある抜け目のない投機師に売りわたしてしまった。ピガーソフはそこに家を建てたばかりだったのである。この最後の打撃に心の底からうちのめされた彼は、妻を相手どって、訴訟を起こしかけてみたが、なんの得るところもなかった。そして孤独な余生を送りながら、近所の地主の家をめぐり歩いていた。かげではむろんのこと、面と向かってさえも、他人をののしるので、彼らからまじめにこわがられていたわけでもないが、なんとなくこわばった薄笑いでむかえられるのであった——そして書物などはたえて手にとることもなかった。百人ほどの農奴をもっていたが、その百姓たちは貧乏はしていなかった。

——あ！　Constantin！——パンダレフスキーが客間へはいってくるとすぐダーリヤ・ミハイロヴナが言った——　Alexandrine　はみえるの？

——アレクサンドラ・パーヴロヴナからは、お礼のことばを伝えるようにとのお申しつけで、ことのほかお喜びのようでございました——コンスタンチン・ヂオミードィッチはそう答えながらも、あたりへ愛想よく会釈をしたり、爪を三角にとがらせた、太くて白い手で、その見事にとかした髪をおさえたりした。

——それから、ヴォルィンツェフさんもくるの？

——おいでになります。

——そうすると、どうなんです、アフリカン・セミョーヌィッチ——ダーリヤ・ミハイロヴナはピガーソフの方を向いて、まえの話をつづけた——あなたのお説だと、お嬢さんたちはみんな不自然だというわけね？

ピガーソフのくちびるは横にまがった。そして彼はいらだたしげにひじを動かした。

——わたしの申すのは——と彼はゆっくりした調子でぎりだした。いらだちがとりわけひどくなると、かえっていそがずに、はっきりとしゃべるのがこの男のくせだった——わたしの申すのは、令嬢がた一般についてのことでして、むろん、ここにご臨席のかたがたについて、とやかく申しておるわけではありません……

——でも、だからと言って、ここにいる人たちについては、そう思っていないということにはなりませんわね——とダーリヤ・ミハイロヴナはさえぎった。

——わたしはこのかたたちについてとやかく申しているわけではありません——とピガーソフはくり返した——一般にお嬢さんがたというものは、そろいもそろって、きわめて不自然です。自分の感情を表わすのに不自然なんです。たとえば、びっくりしたときとか、うれしいとか、悲しいとかいうときには、お嬢さんというものはかならず、まず自分のからだをこんなふうに、優美にまげておいて（こう言って、ピガーソフはこの上なくぶざまに体をねじまげ、両手をひろげてみせた）、それから、あぁと叫んだり、笑いだしたり、泣きだしたりするでしょう。しかし（ここでピガーソフは満足そうに微笑した）わたしはあるとき、特別不自然な、あるお嬢さんに生地のままの本音をはかせたことがあります。

——どうやって？

ピガーソフは目をかがやかせた。

——そのお嬢さんの横っ腹を、やまならしの棒杭で、うしろからひっぱたいたんです。きゃっと言って悲鳴をあげたんで、わたしは言って

やりました。ブラボー！　ブラボー！　これこそ自然の声、生地のままの叫びです。これからもいつもその調子でおやりなさい。

部屋のなかのすべての人が笑った。

——なんてばかげたことを言うんです。アフリカン・セミョーヌィッチ！——とダーリヤ・ミハイロヴナが言った——若いむすめさんのわき腹を杭で打つなんて、わたしが信じると思うんですか。

——ほんとうです、杭でたたいたんです、要塞に使うような、でっかいやつで。

——Mais c'est une horreur ce que vous dites là, monsieur（でもあなたのおっしゃることは恐ろしいことです）——とマドモワゼル・ボンクールが、笑いこけている子供たちの方をときどきにらみながら、金切り声で言った。

——この人の言うことをほんとにしてはいけませんよ——とダーリヤ・ミハイロヴナが言った——あなた、この人のことは知ってるでしょう？

しかし、いきりたったこのフランス婦人はなかなか落ちつくことができないで、いつまでもなにかつぶやいていた。

——信じていただけなければ、それもやむをえません——とピガーソフはひややかな声でつづけた——しかし、ほんとうの話だということはうけあいます。本人のわたしが言っていることなんですよ。それでは、これもおそらく信じていただけないでしょうが、うちの近所のエレーナ・アントーノヴナ・チェブーゾワが自分で、いいですか、自分で、わたしに話してくれたんですが、それによると、あの女は実の甥を殺したんだそうです。

——それ、またそんな作りごとを！

——ちょっとまってください！　しまいまで聞いてからにしてください。いいですか、わたしはあの人を悪く言うつもりはないのですよ、それどころか、好意をもってさえいます。もっとも、ご婦人というものに好意をもちうる限度内でのことですがね。あの人のところには、家のなかのどこをさがしても、暦のほかには、本というものが一冊もないし、また本を読むにしても、声に出さなくては読めない、黙読の練習をすると汗びっしょりになるんです。そして目玉がとび出すほど痛むとこぼしています……要するに、善良な婦人で、女中でも、あそこのはまるまるとふとっています。なんでわたしがあの人をわるく言うことがありましょう。

——そら——とダーリヤ・ミハイロヴナが言った——アフリカン・セミョーヌィッチのおはこがはじまった——こうなったら、晩までやめっこないわよ。

——わたしのおはこですって……ですが、ご婦人がたにだって、眠っているときのほかには、けっしてやめないおはこが三つもありますよ。

——その三つって、なんです？

——いやみ、あてつけ、こきおろし。

——ねえ、ちょっと、アフリカン・セミョーヌィッチ——とダーリヤ・ミハイロヴナは言いはじめた——あなた、女にそれほど腹をたてているには、わけがありそうね。きっとどこかの女があなたを……

——ひどい目にあわせた、とおっしゃりたいんでしょう？——ピガーソフが彼女をさえぎった。

ダーリヤ・ミハイロヴナはいくらかまごついた。ピガーソフの不幸な結婚のことを思い出したからだ……そしてかすかにうなずいてみせた。

——たしかに、ひとりの女にひどい目にあわされました——とピガーソフは言った——もっとも、善良な、とても善良な女でしたがね……

——それはどういう人ですの？

——母親です、わたしの——ピガーソフは声を落として言った。

——お母さんですって？　なんでまたお母さんがあなたをひどい目にあわせたんですの？

——わたしをこの世に産み落としたからですよ……

ダーリヤ・ミハイロヴナは眉をひそめた。

——話が陰気くさくなってきたようね——と彼女が言った——Constantin タールベルクのあたらしいエチュードをひいてちょうだいよ……音楽がアフリカン・セミョーヌィッチの心をやわらげてくれますよ。オルフェウスはけものの心もしずめたと言いますからね。

コンスタンチン・ヂオミードィッチはピアノにむかって腰をおろし、見事にエチュードを弾

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com